



愛川ふれあいの村 今月の風景

2021年10月 自然のたより

秋の長雨もようやく終わり、朝晩の冷え込みが秋の深まりを感じさせます。虫の音も次第に小さくなってきました。あれほど豊作だった村の柿は今年、残念ながら不作です。でも、柰榴（ザクロ）は去年より数が多いように思います。同じ村内でも年による違いがあります。10月の末にはいよいよ冬の鳥たちが村を訪れます。去年は10月31日にアオジが、11月5日にジョウビタキが観察されています。今年は早まるのか、遅くなるのか。今ごろは長旅の準備をしている頃でしょうか。もうすぐ会えます。（高梨）



ツリフネソウ



ザクロ



ムラサキシメジ



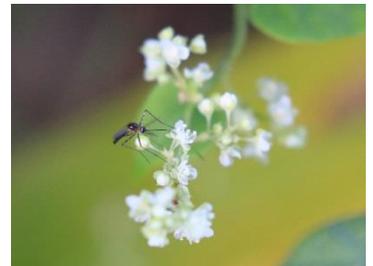
アキノキリンソウ



ホトトギス



セキヤノアキチョウジ



ツルドクダミ



エナガ



雨の日のスナゴケ



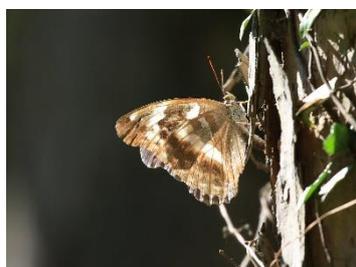
竹から生まれたスッソク



カラカサタケ



イシサワオニグモ



メスグロヒョウモン



ミルンヤンマ



ハラビロカマキリ

トピックス ★十三夜★

9月の十五夜はよく知られていますが、みなさんは十三夜をご存じでしょうか。十五夜に比べてなじみのうすい習慣かもしれませんが、仲秋の名月である十五夜に次いで美しいとされる10月の月夜です。

英語圏でも各月の満月にフラワームーンやピンクムーンなどの名前がつけられているそうです。おそらく、全世界共通で満月は美しいとされ、特別な名前を付けたくなるような存在だったのでしょう。十五夜も中国伝来の習慣で満月を愛でる習慣です。

それに対して、十三夜は日本独自の風習です。新月から数えて15日目の満月が十五夜なのに対して、13日目の十三夜は満月に少しかける月になります。

すべてを満たしているよりも左右非対称、新円に少し欠けている。未熟さや影があるが故に「美しい」ととらえる感性は、日本人の奥ゆかしさ、謙虚さを感じますね。

平安の頃から十五夜、十三夜両方とも見るのが風流とされてきました。逆に、どちらか一方しか見ないことを「片月見（かたつきみ）」と呼び縁起が悪いこととされています。今年（2021年）の十五夜はあまり天気が良くなかったので、お月見をされた方は少なかったかもしれません。となると、十三夜も見ない方がいいのでは…となりますが、せっかくの名月ならみたいものです。

私の家では十五夜、十三夜ともに母がけんちん汁を作ってくれました。天気がよかろうが、悪かろうが毎年2回お月様にお供えをします。きっと片月見にならないように、目で見えなくてもお月見ができるようにと母がこの行事を大切にしてくれていたのではと大人になって気づきました。

十三夜。月は顔を出してくれるでしょうか。とても寒いと予報が出ています。けんちん汁を子どもと食べて温まりながら眺めたいと思います。（林田）

生き物 ★名前の覚え方？★

カシワと聞いたら、どのような葉を思い浮かべますか。カシワバハグマやアカメガシワ、ミツガシワなど、“カシワ”と名の付く植物があります。カシワの葉に似ているからという理由なのですが、どれもあまり似ているとは思えない…カシワのように大きな葉なら納得はいくかなといった感じです。

植物の名前には苗字と名前に分けられるものがあります。カシワの葉（バ）に似たハグマさんがカシワバハグマ。このように名前をパーツに分けて考えると、意味を理解しやすく覚えやすいです。わかりやすいところでは、〇〇サクラや〇〇スミレなどですかね。生き物の名前を早く覚えたいという方は、ぜひ試してみてください。

（石川）



旬 ★秋の七草はたべられません★

『春の七草』は1月7日に七草粥を食べて1年の無病息災を祈るのに対して、『秋の七草』はその美しさを鑑賞して楽しむものです。一部は薬用など実用的なものもありますが、春の七草のような食べ物ではありません。名前の覚え方は、語呂合わせで覚える方法が簡単です。「おすきなふくは？（お好きな服は？）」お＝オミナエシ、す＝ススキ、き＝キキョウ、な＝ナデシコ、ふ＝フジバカマ、く＝クズ、は＝ハギです。この七つのうち村内では、オミナエシ、ススキ、キキョウ、フジバカマ、クズ、ハギが観察出来ます。ぜひ探してみてください。（高梨）



お す き な ふ く は

来月の見どころ 種ちゅうじがふじく

秋の野原を歩くと、洋服にびっしりと又スビトハギやコセンダングサがくっついていくことがある。べたべたしたメナモミやチヂミザサで困ることもある。秋風に乗って、フワフワとアキノノゲシの種たちが飛んでいく。小さな無数の種は綿毛の下に黒い種を付け落下傘のようにフワリと浮き親元を離れて行く。ススキの穂も同じように風に乗って遠くへ飛ぶ風散布型です。

鳥など動物に食べられて運ばれる種子は、マユミ、ガマズミ、ヒサカキなどで小さな種はメシロやコゲラなど小さな野鳥に食べられ運ばれる。ドングリはカケスやカラスに運ばれる。ヒマラヤスギの種子は、風に飛ばされもするがシメヤイカルの好物でもある。小さなアリもスミシヤカタクリ、ムラサキケマンなどの種子を運んでいるのを見かける。この種子はエライオソームと言う栄養豊富な脂肪酸がありアリの巣に持ち込まれるが、食べた後は巣の外に捨てられる。

弾けるゲンノシヨウコやツリフネソウは少しでも遠くへと飛ばうとしている。植物は、それぞれの特性を生かしながら遠くへ遠くへと種子を運び子孫繁栄を図っている。種はどこからどこへ飛んでいくのだろうか。（吉田）

